

忘れ得ぬままに

東京都 佐々木 譲 二

私が物心ついて、その後のマニラ市は米領であったため、市内は清潔でF D A (FOOD & DRUG ACT)の衛生思想で現在のようない貧困で見すばらしい景色ではなく、ピカピカ光っていたマニラでありました。

昭和十六年十二月八日、小学校へ宿題の工作々品を持って登校し、校門へ行きましたところ、先生が階段の上で「今朝日本とアメリカがハワイで戦争を始めた。すぐ家へ帰りなさい」という。

兄弟三人で家へ帰り、母に伝えますと大変だと、す早く南天寺に集まり、そこから大同貿易の広大な社宅に大挙して疎開しました。

疎開後、誰々さんと誰々さんがモンテンルパに連れて行かれ、間もなく、フィリピン兵が銃を持って、威勢よくなだれこんできました。日本軍の飛行機めがけ

て小銃を嬉しそうに撃っていました。三週間もかからず、日本兵が入ってきました。白い遺骨を胸に抱いた兵士が乗った戦車が入ってきました。この疎開も終り、懐かしい家に帰ることができましたが、家財道具いっさいが終戦時と同じく、なくなっていました。

昭和十七、八年は訳も解らぬままの大東亜共栄圏とか、一人でも教育勅語をおぼえられない級友がいると全員が連帯責任ということで殴られて過ごしました。

昭和十九年春、小学六年生の時、海軍第一〇三部隊の軍需部に動員されました。夢のようなルネタ公園は芝生ははがされ、無残な高射砲陣地に一変しました。マニラ湾に沿った今のロハス大通りのマンングローブと椰子の並木は切り倒され、特攻機の滑走路に早変わり、殺伐とした景色となりました。

昭和十九年十二月下旬、マニラを父を除く一家六人で脱出し、日本人会とサンホセの教会で合流、二十年の元日を同市で迎え、旬日後、バレテ、サラクサス峠を夜間越え、バヨンボンに入りました。その後すぐボンファルに移り、そこに元動員先の海軍軍需部の誘い

で一家六人、ソラノの軍需部本部に移りました。

日本人会の本流はしばらくボンファルにいたようですが、その後、ソラノを真つ直ぐ北上し、バガバッグ方面からジャングルに入ったと聞いていますが、私どもはこのソラノから北上せず、西に入り、しばらくアゴブ、(バガバッグの山のひとつ) 南の田園集落でしばし安穩な時期を過ごしました。海軍に動員されて以来、土・日曜日を除くほとんど毎日、きびしいグラマン、ロッキードP38、マーチンB26等の空襲があつたことはいうまでもありません。

昭和二十年六月八日、(兄の誕生日で覚えていますが) 平野地最後のアゴブからジャングルの麓・ウジャワンに入りました。夜をつぐ強烈な砲撃のもと、篠をつく雨の闇夜、大川を泳ぐように渡り、岩の断崖を昇り、ジャングル山中に入りました。それからは、この世のものとは思われないことが多くありました。なかでも生きている人間にウジが取りついて苦悶していた兵士、二歳下の弟が夜通し苦しみながら十一歳で死に、今でもあの埋葬した時の悲しみが鮮明に思いおこされ

ます。

戦争が終り、米軍の前に出ていったのはおそらく八月十五日をそうとう過ぎていたと思います。たいへん気の毒であつたのは、終戦を知らずか、前夜、米軍に切り込んだという陸軍伍長の階級章をつけた軍人が無念そうにこと切れていた。その人のご両親家族が知つたならどんなに悲劇であつたことか、今でもふと思ひ出します。

終戦後数年、さつまいもの若芽が地表に出ているのを見つけた夢と、親父は生きて帰ってこないかなあ、(実際には二十年七月、ルソン島東部海岸の山中で戦病死していました) の夢が続きました。

ルソン島の上空を旅客機で通過するたびに、親父と弟の冥福を祈っております。